

本論文の前半では「中国絵画をめぐる世界」として作品の外部の制度やコレクション、日本という枠組みとの関係をめぐる議論を中心に13本の論文を、後半は「作品の世界を読む」として、宋元から明清におよぶ17本の作品の内側に迫る論考が時代順におさめられている。本書があつかう範囲は古代の出土遺物の模様から、仏教絵画、元明清の文人画、近代に至るまでは幅広く、725頁にもおよぶ論文である。

前半の議論は中国絵画の制度や意味をめぐる外側の枠組みの問題を扱い、特に近世中国の根本的なシステムである科挙が文人山水画を支えるという構造的関係性を論じ、非対称の視線として中国と日本美術との比較を試み、また絵画の受容者の視線を作品研究に取り入れる形での吉祥モチーフの意味の解明へと続く。また申請者の特筆すべき方法論として、日本の模本・縮図の使用があるが、ただの「失われた図様」の資料としてではなく、明時代の複製や工房での生産といった文脈のなかに位置づけることに特色がある。続く近代の問題をあつかった論文群は日本の中国美術研究を本格的に回顧した嚆矢と言ってもよく、これらの論文から派生する多くの研究や展覧会が生み出されていったことも特筆すべきであろう。

また後半ではまず宋元の道釈画と人物画の問題が扱われ、調査がまだ困難な時期に山西省の寺院壁画に赴き、精緻に実地調査した論文の価値は今でも失われていない。「十王図」(静嘉堂文庫美術館)、周文矩「宮中図巻」、そして張叔端「清明上河図」と論述は続き、続いて(伝)李嵩「西湖図」では、作品と杭州の文人サークルの係わりの中で位置づけるという新たな視点を示し、南宋宮廷絵画と文人意識の関係、趙孟頫と「瀟湘臥遊図」では、文人山水画の成立と職業画家の山水画の関係という視点からの興味深い論考が続く。また明清絵画についての論考では非常に綿密な文献的な考証と絵画の両面から、沈周「東荘図」の成立過程や、仇英の真偽論、「韓熙載夜宴図」の派生図像、徐渭(特に東博本、泉屋博古館本)と浙江地方の文人(禅林)墨戲との伝統の連続性を指摘し、董其昌「婉孌草堂図」における实景の関係、そして八大山人「安晚帖」や石濤「黄山図巻」等、具体的な作品の成立状況や新しい山水画創出へとむかっていった過程が新たに解明されている。

本論文中に述べられるように、申請者はジェンダー研究の視点から中国絵画に新視点をもたらし、従来までの伝統的な中国書画研究を継承しつつそれを乗り越え、作品に即し緻密な様式分析とディスクリプションを行い、文献を読み解くことを統合しながら結論を導き、新しい方法論によって実作品に即してそれを言語化したことに重要な意義がある。1980年代からの40年間は、従来ほとんど日本人が中国の現地調査ができなかった時代から徐々に多くの作品が中国で出版、公開された時期に当たるが、世界の中国書画コレクションを相対化しながら、その学問的言説や価値を新たな角度から読み直し、既発表の論考にも新たな視点を加えて今回の博士論文として提出された。審査では明代の刊本の問題や「十六羅漢図」(清凉寺)の江戸時代における受容など新たな論点も提出されたが、今後のさらなる研究の進展によって解決されていく課題であると思われる。よって、審査委員会は本論文が博士(文学)の学位を授与するに値すると判断する。